

教師が生徒に「出てくるだけでもいいから学校に出ておいで」と言うとき

センター協力研究員（上智大学文学部助教授）中 釜 洋 子

学力低下の問題について、私が述べられることは残念ながらほとんど何もない。何を書いたものかと苦しんでいたら、表題に掲げたようなエピソードが複数思い起こされてきた。10数年ぶりに公立校のスクールカウンセラーを勤めた時期に見聞きした、または、学校臨床のスーパービジョンを引き受ける中で触れたいくつかのことともである。私としてはそんな風に言った教師の決心に全面的に賛意を示したいと思う。が、どこかひどく無念そうな当人の気持ちが感じられる。なるほど教師達は教育の専門家なのだと再確認し、それにも関わらず「とにかく学校に出てくるだけ出ておいで」と言うことに切り替えた変化の大きさが改めて伝わってくる。以下にそのうちの一つを支障のない範囲で記してみたい。

中学2年生W夫の担任だったY先生の体験である。Y先生は当時20代後半の女性教師で、W夫は強がっているがどこか憎めない、気持ちの優しさが感じられる生徒だった。そんなW夫の身長が、中1の後半辺りからぐぐぐいと伸びた。顔の丸さがいつの間にか消え、提出物の遅れや遅刻、授業態度の悪さが目につくようになった。元々勉強は苦手、放課後の課外活動目当てに学校に来るようでもあったが、授業中はますます上の空、時に昼近くに登校しいきなり机に突っ伏してしまう。回ってくるプリントを突っ伏した姿勢のまま後ろへ送るか、前の席の生徒が気を利かせ彼を越えて配る状態になった。W夫の変化をもどかしく感じたY先生は、こまめに呼び出して話をするように努めた。まだ大丈夫、話せばきっとわかってくれると感じていたはずが、呼び出し回数が嵩むにつれ、また、頻繁な遅刻の戒めとして課外活動への参加制限を匂わせたあたりから、ふてくされ顔という以上に牙を剥いた動物の表情になった。後から、腹痛や体調の悪さを訴えていたことが思い出された。が、当時は遅刻や怠学の言い訳と受け取り、自分も他の教師も心に留めなかった。だらしなく垂れたシャツをズボンの内側に入れる入れないで騒動が持ち上がり、指導に当たった教師に暴言を吐いたところでいよいよW夫の親が呼び出されることになった。

これまで、W夫の親はなかなか学校にやって来なかつた。今回は避けられないはずが、容易に保護者面接

は実現しなかった。W夫を通して何度も促した末によくやくかかってきた電話で、母親は、学校側の対応を非難し「迷惑なら学校に行かせない。学校に行かせなければ問題はないだろう」と言い放った。翌日、Y先生にひとりしきり噛みついた後で、W夫は本当に学校に出てこなくなった。W夫の住まいを訪ね、僅かに開いた窓から室内の様子を覗き見てW夫が随分痩せてしまったとはっとした時があったのだそうだ。「遅刻してもいいから学校に出ておいで。家に一人でいないで、給食だけでも食べにおいて」と、そんなメッセージを書き残してきたと言う。

妹が通う小学校からの連絡で、さらに深刻な事態が潜行していたとわかったのはその何日くらい後だったろうか。W夫家族は数年前に父親と離別、母子三人で暮らしていたのだが、母親がほとんど家に帰らなくなっていたらしい。数日に一度戻って来た母が置いて行く小銭を切りつめて、菓子パンやコンビニ弁当を買って兄と食べていた。ここしばらくは母がずっと帰っていないと妹が泣きながら話してくれたそうだ。学校から児童相談所に通告され、すぐに母親の捜索が始まった。Y先生始め学校中が気を揉んだが母親は現れず、W夫の強い拒絶にも関わらず、一時保護を経て二人は他県の父親宅へ引き取られていった。

「担任として結局何も出来なかった」と振り返ってY先生は言った。「蓋を開ければ開けるほど、どんどん悪い方へと転がっていった。小説でもあるまいに、そんなひどいこと起こるはずはないとかをくくっていたのに。坂道を駆け下りるみたいで一度も止まらなかった。私の話を聞いてくれ可哀相だと涙を流す自分の母親を見て、私は幸せに育ったんだ、だから踏ん張らなければとそれだけ思っていた」と言った。そう言えば、大変さのただ中、Y先生は学校の最寄り駅のホームの汚なさ、誰も手を出そうとしないゴミの散乱ぶりが心に刺さると言っていた。反対に、手をかけられている様子、誰かが誰かに心を碎く様子に触れることでY先生の頑張りが支えられていたのだろう。そしてY先生の頑張りがW夫の一部を支えてきたのだろう、Y先生は過小評価することかも知れないが。